

# 尾瀬

第 4 号

## 尾瀬の自然を守る会

群馬県、九月定例議会に

1,570万円

(一ノ瀬駐車場建設整備費)  
を計上!!

群馬県は、この9月定例議会に1570万円の一ノ瀬駐車場建設整備費を計上した。県当局は「県会の承認を得しだい、年内にも着工したい」としている(朝日新聞9月26日報)。

われわれは、一ノ瀬に駐車場を建設することは、すでに破壊の進んでいる尾瀬をさらに壊滅的な破壊へと導く導火線になると考え、群馬県当局が画策する駐車場建設に絶対反対のキャンペーンを、過去何回となく繰り返してきた。

今回、再び予算計上がなされ、群馬県当局が依然として頑固に“やる気”を示していることを見ると、馬の耳に念仏であったことが思い知らされる。世界に誇り得る尾瀬の自然の大部分をかかえる群馬県が、一時の感情におぼれてこの宝物を壊し、末代まで残る失政をあえて行なおうとしていることは、まこと不可解きわまる話だ。

1971年12月1日、三平峠の豪雪に斃れた平野長靖氏から何一つ学ぶことのない群馬県当局の頭のはげた幹部たちは、それから3年後の今日「駐車場は三平峠から一ノ瀬ま

### 年内に着工か

で後退し、規模も縮少したのだから、中止するわけにはいかない」(永井県商労部長)などと、うすら口を叩いて恥じないありさまである。

こと、この駐車場に関する限り、群馬県当局は、人間回復への時代の流れ、人類の英知に逆行する愚鈍な政策を取り続けて省みないと言える。観光一辺倒政策なるものが地域住民にもたらしたものは、経済的混乱と人間の荒廃ばかりであったことは、すでに全国津々浦々に明らかである。お手軽な金集めの、おらが県さえよければいい、という島国根性になお群馬のエリートは落ち込んでいると言わねばならない。

また、自然公園を守る環境庁にしたところで「一ノ瀬に駐車場を作ることは大石長官時代からの約束だ」(宇野環境庁計画課長)と馬鹿の一つ覚えを繰り返すだけで、全く何の役にも立たない。今でさえバンク寸前の尾瀬に、さらに大量のハイカーを送り込む結果になるこの駐車場を、大石長官の口約束だけで時代の流れを無視して認めようというのは、お役所仕事の渋滞というよりは醜態である。

## 「連絡協」「守る会」環境庁へ 宇野課長と会談

9月27日(金)、上京した「尾瀬を守る会連絡協議会」の今井、山田両群大教授と「尾瀬の自然を守る会」の宮下、岸、内海の三会員は、環境庁へと足を運んだ。

群馬県当局が、9月定例議会に一の瀬駐車場整備費1570万円を計上したことについて環境庁の姿勢を糾すためである。自然保護局長が不在のため、宇野計画課長と2時間にわたって会談したが「大石長官の約束」と繰り返すだけで何の進展もなかった。長官や局長は次々と人が変わるので、長期に亘り課長を勤める宇野課長が、環境庁におけるスクープマンのような存在になっていたが、その宇野課長に思索の跡は全くない。

宇野課長のことは次のようなものである。すなわち、駐車場を作つて道路問題に結着をつけてから、入山制限その他の検討に進みたい。大清水小屋(2軒)もないがしろにせず、観光バスは一ノ瀬でUターンさせ、大清水まで戻す。駐車場は木を切らず、便所などを作る。マイカーは入れないで、定期バスのみの駐車場とする。また大清水から一ノ瀬までの旧道を整備し復活させる。

### <ニュース>

#### 自然保護委員会の決議

(日本自然保護協会)

日本自然保護協会の自然保護委員会が9月30日に開かれた。尾瀬一ノ瀬駐車場建設について討議、この駐車場が自然保護の立場から全く無意味のものであり、若しここに駐車場を作り、路線バス、観光バスを乗り入れすれば、現在でさえオーバーユースの尾瀬の混乱と自然破壊は入山による踏み荒しと排気ガ

だが、マイカーをどうやって規制できるのか。旧道を復活するなら(これは賛成だ)、なぜ大清水に駐車場を作らないのか。大清水から一ノ瀬に至るまでの美しい光景も排気ガスで枯れ落ちるに違いない。それはやがて、一ノ瀬から岩清水に至る二車線道路がいま周囲を含めて惨憺たるものであるが、それにだぶって山肌を食い荒すだろう。それは自然公園などという代物ではない。処置は東京電力や尾瀬林業の企業利益、東武バスの企業利益に奉仕するためにはかならない。

福島県側は、御池でマイカーを食い止めることを来春から実施すると聞くが、群馬県側は大清水に矛を納め、むしろ福島県に御池で一切の車を止めるよう勧告していくのが、尾瀬を守るために誠実な態度ではなかろうか。環境庁は、東京で高い給料をもらいながら居ねむりしているのではなくて、積極的に両県に対し説得に動くのが正しい環境行政ではないだろうか。そうでなくて、ますます荒廃の度を深める日本列島を立ち直らせる下地さえできないと言わなければならない。

(青木記)

<9月30日、朝日新聞投書欄から>  
時代錯誤、群馬の尾瀬破壊

横須賀市 林 哲也

尾瀬一ノ瀬の駐車場建設計画が群馬県によって強行される。大雪山などの自然破壊を反省し、スカイラインなどの建設を自粛しようとする時代にあって、群馬県は何故強行するのであろうか。

日本を代表する尾瀬が一地域の行政によって破壊されていいのであろうか。尾瀬は日本国民の尾瀬であって、群馬県の尾瀬ではない。環境庁は群馬県の強行をどう考えているのであろうか。私は、群馬県のこの姿勢の背後に

は「都会の人間は、年に一、二度来るだけ、地元のことはわからちゃいないんだ」という受け止め方があるのでないかと考える。

都会の人間は、尾瀬に歩きに行くのである。自然の尾瀬を愛するが故に、車の通る道はいらないというのだ。私は群馬県が強行しようとしていることは、自然ばかりでなく、人の精神まで破壊しようとしていることを止めることをめざす。（商業 31才）

### 会員便り

#### 関口金次郎さんを悼む

宮下孝介

癌が有為な青年の生命を奪った。

関口金次郎さんの死は5月27日、長蔵小屋の平野紀子さんによって知らされた。

「22日の午後6時に、桐生の関口さんが亡くなつたんです。ショックです。たいへん尾瀬を愛してくれた人でしたのに……」平野さんはとりわけ身につまされるものがあつてか、涙声が電話に消えた。

関口さんに初めて会ったのは、前橋で「尾瀬を守る連絡協議会」が結成されるときだった。

頑健そうな山好きな青年の鮮かな印象を忘ることはできない。

関口さんは尾瀬研の機関誌に投稿し「なぜ尾瀬を守る会が二つに分裂しているのか。目的が一つなのに会がいろいろあるのは、なんとなくおかしい」と問題提起（10月10日発行“おぜ”19号），さらに「少なくとも群馬県内にある労働組合はすべて、この尾瀬の自然を守る運動に参加すべきである。自

然を破壊してなんの「生きがい」を求めるのか！私は労働組合の一員としてこれから労働組合がいかに自然保護に取組むかを積極的におしすすめたい」といって運動を続けていた。

この投稿が大きなきっかけになって、守る会と尾瀬研の合同団結の話しあいがはじめられ、一月に徹底的な討論の上に闘いの一本化をはかるため、小異も残すことなく尾瀬の自然を守る会に結集できたのでした。

この団結を何よりも喜んでいたあなたは、奥さんと1人のお子さんを遺して忽然として逝去されてしまった。断腸の想いです。

行為に生きて年数に生きることのできなかつた関口さん、私たちはあなたの残してくれた尾瀬の自然を守る情熱を受けついで、さらに強い運動を展開しつづけることを誓います。

いま幽明境を異にしても、あなたは平野長靖さんのもとにあって、どうか私たちの活動を見守って下さい。

遙かなる尾瀬が永遠であるよう。

## 湿原を訪ねて

水野 史

8月上旬～中頃にかけての尾瀬ヶ原は、ニッコウキスゲも咲きおわり、秋の花にとってかわろうとする季節で、花を尋ねての旅には多少もの足りなさを味わうような気がします。

それでも、山の鼻から原いでいくと、すぐ木道の左側に朱赤のコオニユリが燃えるように直立しているし、原全体に目をむけるとまだ秋の枯草色には少し間がある緑の湿原にコバギボウシやサワギキョウが紫色の頭をもたげ、その間をワレモコウの赤紫の丸い頭が飾っています。木道に沿ってさらにいくと、黄金色のキンコウカが……小さな薄桃色のトキソウが……あらわれてくるのです。

だんだん気をよくして歩いていくと、牛首を越えた池塘の中に、スイレンの仲間が浮いているのを見つけました。黄色のオゼコウホネと純白のヒツジグサです。

オゼコウホネは、尾瀬の特産だそうですが、利尻にもあると聞きました。川骨とは少し薄気味悪いですねえ……ヒツジグサは真白な花です。この純白は、優美という語をもつとも映えさせてくれる……そんな気がします。水面に葉と花とを別々に配置し、さやかな波に身をゆだねている。水中では、長い莖をのばしてしっかりと固定しているのだろうに、何事もないかのように知らん顔し、水面に浮かぶ純白花。ちょっとクールな感じがしました。

いつまでながめていても、見むきもしないので、先を急ぐことにします。橋上に垂れかかるナナカマドももうまもなく赤く色づくでしょう。明日から、風が一朝一朝、秋を運んで湿原が染まる季節になります。

## 尾瀬憲章の看板について

安島 克久

6月の1日と2日にかけて、大ざっぱなが

ら富士見峠→原→沼→三平峠の順に見学させて頂きました。年甲斐もなくお笑いでしょうが30年来の憧れてやまなかつたところです。残雪峨々として、始めての登山行には必ずしも歩行は楽ではありませんでしたが、幸い、好天に恵まれ、最近にない充実感をもって帰宅できました。

だが、私も自然愛好家の端くれです。少ない時間とバス酔いに悩まされながらも、及ぼすの能力であっても懸命に見てきましたが、いろいろある中で特に急がなければならないと思うものについて一言いわせていただきます。

それは富士見峠に掲げてある群馬県が立てた「尾瀬憲章」の看板です。

夜行でたって朝がけのバスにゆられ、呑まず食わずの私の目に写ったのは、なんと、この秀れた自然を要約し、立派に保全することを誓約した大看板が、継ぎ目板のすれから上下の文字が一線に並ばず、読むのに困難であったことです（三平峠は異状ありませんでした）。

「この学術的価値を評価し、保護することは我らの責務であるので、県民あげて後世に伝える。そのため皆さまも次の5つの項目にご協力下さい」とあったが、今、これ程騒がれ、その姿勢を問われている時に、万人に訴えるものにしては誠に非常識であり、迫力に欠け、熱意のなさにがっかり致しました。

47年の5月建設ですから尾瀬の中では比較的新しい方ですし、人々は、本当に気をつけて、回りにある字句を一言半句読んでくるものです。それなのにこんなことでは、県は、ひたすら観光事業にだけしか頭がないといわれても仕方ありません。速刻修理させて下さい。

大方の予想はつけて参りましたが、聞きしにまさる混雑に瞠目し、湿原はじいっとこれらえているなとすぐ感じました。私たちの海岸地でも同じですが、自然は人類の重圧にひしが

れているのです。お互いに息ながく頑張りましょう。

6月10日

福島県いわき市勿来町関田北町63

勿来県立公園を守る会事務局

自然は泣いています。日本中で  
林 哲也

沼尻への道を歩き始めました。朝の冷気は気持ちよく小鳥が鳴っています。こぼれ日が木の間からさしこんできます。朝の尾瀬銀座通り(三平峠一長蔵一沼尻一下田代一上田代一鳩待)は、まだ静かです。しかし、その静けさは、一瞬の内に雜踏の中に成りました。団体が向って来るので、「こんにちは」という声に、人の気配に小鳥はとび去っていきました。冷気は暑さに変りました。

「こんにちは」「コンチワ」「こんにちは」「コンチワ」「こんにちは」「コンチワ」…約100名程の人々に、私一人が返事する苦痛は、やがて怒りに変りました。何故あの入達に返事しなければならないのでしょうか。あの入達は本当に尾瀬の自然に接しているのでしょうか。いや自然を愛するといいながら、ゴミやし尿の問題を考えない破壊者達ではないでしょうか。

ある会で現地集会という団体旅行をしています。自然保護を唱える者が本当に現地集会で問題解決ができるのでしょうか。

私は、「現地集会」に過去参加した者の一人として反省したいと思います。その意義とするところは、その主催者によれば、

①尾瀬のすばらしさと破壊の現状を一人でも多くの人が知ることにより、自然保護運動に、誰でも参加しうるようにすること。

②守られるべき現地に關係のある各団体、個人の統一行動を大きく生み出す機会をつくりだすこと。(「経済」49年9月号参照)だそうですが一つ一つよく考えて

いきたいと思います。

まず①について、自然保護運動に参加する機会をつくることは大切だと思います。しかし、そのために入を連れていくことは少人数でしてもらいたいと思います。でなければ、尾瀬の本当の価値を見い出すことができず、前述の様に他人に迷惑のかかる事を考えて頂きたいと思います。人と人の間のみならず、大勢のし尿などで湿原を富栄養化させることを促進してしまい、自然破壊をしていることを忘れないで頂きたいのです。破壊の現状は、何も道路工事や、ゴミの現状を見るだけでは、本当の理解とはいえません。

②については現地との接触のない団体が、今さら何を…という気持です。連絡協や他団体、それに山小屋からも非難を浴びている状態を会の個人個人は知っているのでしょうか。又何故非難を受けているのか知って頂きたいと思います。団体の参加は、その幹部の意向のみでは決して真の市民運動ではありません。参加者一人一人の意見の結集がなければなりません。

私は、何故「現地集会」がいけないかを二つの面から主張します。それは自然が破壊されるからであり、そして人間が破壊されるからです。自然が破壊されるのは、前述の通りであります。人間が破壊されることについて、私は、特に申し上げたいと思います。会の内部では人を集めることがその意義の一つである様なことをいいます。まるで観光業者ではないでしょうか。そして一人の人の意志により画一的な精神統一がされています。その様な中にあって自由な討論、討議は認められません。自然観の統一すらやろうとする専制的な態度に、眞の市民運動があるでしょうか。そして「現地集会」は常に概念的な決議、行動であるということです。決して具体的、即戦的な運動ではありません。概念で起こす行動には、主義、イデオロギーが付きもので、その概念的イデオロギーがあれば、問題

が解決すると思い違いをしている欠点が「現地集会」にはあるのです。しかし、尾瀬の当事者にとって、概念的解決は望んでいません。具体的な解決があつて初めて成果となるのではないかでしょうか。具体的な解決を一つ一つ進めている者達にとって、概念的に主張されることは迷惑ではないでしょうか。

私は「現地集会」を行う団体がいつまでも自慰行為に終始しないで頂きたいと思います。具体的な一つ一つの問題を解決する実力を早くつけて頂きたいと思います。そのためには、内部的な改革が必要でしょうが、何よりも一人一人が大きな発言をする勇気を持たれたらいかがでしょうか。市民団体とは、一人一人の意見の結集が大切な仕事です。自然保護に

ついても一人一人の意見が、やがて世論になるから、運動をしているのではないですか。

自然は泣いています。日本中で……人間の間での争いに自然は泣いています。自然の身になって一人一人が意見を述べ合うことが出发点だと思うのです。その意味で、私は自然保護運動は、被破壊者達の連携により成り立つものだと思います。その者達の共通点、了解点を確認し合い、自由な討論、意見交換の中に地元の諸問題を解決し、自然を守ることができます。自然の身になって考えることがなくては、自然保護ではありません。大企業に反省を求め、行政当局に訴えるという行動はすべてこれが原点ではないでしょうか。

## 第4回全国自然保護連合総会報告 (5月25日~26日、鳥取県大山)

この総会には、全国から約220人が参加した。尾瀬の自然を守る会からは、小山道雄、武幸子、河内輝明の3君が遠路出席した。以下は、武幸子さんの報告である。

バスを降りるとなだらかな緑のスロープがひと塊りの松林に連なっていた。薄日の射しはじめた淡い空は松林を超えて市街地を超えて真珠色に湾曲している美保湾にとかしこまれていた。冷えた空気がゆっくり降りてくる。振り仰ぐと大山は頭上にあった。原生林すらまだ残っていると聞くふかぶかとした山肌の脚下に白い幾つもの駐車場が拡っていた。画一化された観光地の情景の中で私は一瞬、ここが大山であることを忘れた。

会場附近には三々五々と全国から集まってきた守る仲間の群が演奏会を前にしたようなざわめきを作り出していた。

午前9時きっかり、報道人のカメラが回る中で第4回自然保护大会は地元大山の自然を守る会会长の挨拶ではじまった。中央のひな

壇の後の垂れ幕には「かけがえのないすべての人の自然を守ろう」の文字がくっきり浮かび、会場を埋めた人々の机上にはこの日の為に作られた各地域の種々な資料が積み重ねられていた。自然保护団体の親元ともいべき全国自然保护連合の活動報告は、JUNCその他を通して少なからず認識はしていたが、今、それを運営する人々とその仕事の全貌を知ることは親しい友にめぐりあえたような心のぬくもりを感じた。

現地活動報告は①日光の自然を守る会②自然を返せ！関西市民連合③連峰スカイライン反対連合④大山の自然を守る会の4つの団体からなされた。各々の地域でのユニークな活動報告であったが、中でも関西市民連合のメッシュ方式による大阪府下自然環境現状調査は、その報告書と共にあざやかに色刷りされた破壊状況が印象に残った。又大山の自然を守る会は、土地の買い占め状況を①道路行政と一致している。②国立公園周縁部にかたまっている（国立公園外と園内の普通地区）③

すばらしい景観を独占（古くから山麓の人間が大山から恩恵を受けている土地）等という種々な角度から、わかりやすくオーバーヘッドプロジェクターを利用して説明し、その破壊現状、買い占め現状のすさまじさを教えてくれた。一日目の総会は11時に終わり、午後より各分科会（I-①道路の問題点②都市の生活環境の問題点③土地買い占めとレジャー開発の問題点④埋立と漁業の問題点、II-①現行制度の問題点②行政の住民参加③自然保護思想と教育の普及④運動の展開方法）に散っていった。

大会二日目の総会は8時より開始された。前日、遅く迄、熱っぽく討論された分科会での成果が既に速報として一人一人の手に渡っていた。それらを読み入る中で大山の現況報告、各分科会の報告がなされていった。続いて49年度運動方針案の審議、49年度予算案、特別会計JUNCOの予算案が決定され、いよいよ本大会の決議文へと議事は佳境に入っていた。よくとおる美しい女性の声が12の決議文を読み上げていった。

1. 豊かな自然を破壊する車道の建設はもはや行うべきではない。
2. 自然公園内既設車道についてはマイカーの侵入を規制すべきである。

審議が始まった。「豊かな自然とは何ですか？自然をランク付けしてはならないではないでしょうか？」、「既設車道ではなく道路にして下さい。マイカーだけ規制すればいいのですか？侵入の字はこれでいいのですか？進ではないのですか？」

「何しろ事務局員、全員、昨夜は一睡もしておらず朦胧とした顔で書いておりましたのでいろいろ不備な点が出てくると思いますので、どうぞ、どんどん言って下さい」会場一同笑いの渦がうねった。

一つ一つの決議文を作る難しさはもとより、それら言葉の持つ不思議な魔術も加味した上での改正文は指摘した側もされた側も、すぐ

に名文を思いつかないのが当然であったが私はつい昨日まで見ず知らずであった者同志が自然を破壊していくものに対する共通の憤り、自然への愛が故に、こうして一同に会しつつ一つの決議文に頭を痛めている情景に、そして何よりもそれらを楽しげにやりのけている人々の連帯意識に自らも浸りながら、こみ上げてくる熱い何かを感じていた。

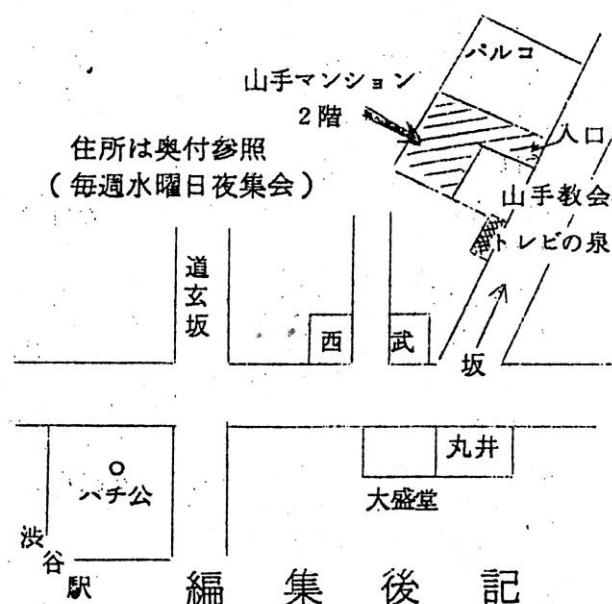
はるばる南の島、屋久島から屋久杉原生林伐採禁止を求めて連合に加盟してきた守る会の訴えは、樹令千年の屋久杉と共に生きてきた島民としての自然と人間の本質的な関わりを深く鋭く提起していた。新たに加えられた水資源の決議文も含めて総計13の決議文と、屋久杉原生林の伐採全面禁止を求める決議と富士保全法反対の特別決議文二つが決定した後、大会宣言が採択された。

行政者と市民が語る自然保護の集いは三木環境庁長官の代理、江間時彦自然保護局長、米子市長、鳥取県知事、岡山県知事等を囲んで行われた。質問には屋久島を守る会、青森市自然保護の会、ニセコ・羊蹄の自然を守る会、静岡県自然保護協会、大山の自然を守る会が立ったが、さすが官僚・江間局長は、話を巧みにすりかえてあたかも質問の主旨がすれ違いの回答の中にあるように錯覚させる見事な回答ぶりであった。

最後に連合理事長・中村芳男氏の「自然保護連合は地方の悩みを共に考える場所であつて、あくまでも運動は皆さん方が主体なのです。中央が主体となって中央が指令するではありません。何でも言ってきて下さい。何処へでも飛んでいきます。そして環境庁へもどしどし出掛けましょう。」の言葉に満場一致の拍手が湧きおこり、第4回自然保護大会の幕は降りた。（武幸子）

## 事務局移転のお知らせ

この7月末、事務局を渋谷の“住民ひろば”に移転しましたので、郵便（通信や連絡など）は、新しい事務局へお送りください。なお、会費等の振込は今まで通りにお願いします。



△編集長の鈴木さんが、この春から社会人になって、どうやら大分しごかれているらしい。そこで、今号は私がピンチヒッターで編集を受けもった。会員便りの中では、少し削った原稿もあるが、お許し願いたい。

△また、トップ記事は私の手になるものだが少々口汚いところもあるが、これは上州人の血の流れがあるのでやむを得ない。それに

しても群馬県人は強情だというが、福田赳夫と総理の座を争った田中角栄が、上越新幹線を通すと言えば安々と通すし、そのために地下水を奪われて深刻な事態に落ち入った小野上村などの状況に、なんら有効な対策も打てないありさまだ。江戸時代からの幕府直轄意識が抜けなくて、自治の精神や思想が芽生えないのだろうが、なんともお粗末な文化政策を繰り返している。

□先日、所要があって沖縄へ行ってきた。ついでに海洋博の会場へ行ってみた。来年の7月から6ヶ月間開催される沖縄海洋博覧会は「海—その望ましい未来」というテーマとは裏腹な無残な結果になるだろうと予測することはむずかしくない。海洋博覧会場に向けて沖縄を縦断する高速道路は、海を埋め、山を削り、ものすごい勢いで進んでいる。沖縄で最も美しいと言われる中部海岸はほぼ全滅であり、海洋博覧会場の本部（もとぶ）海岸は、近くの山をそっくり削っての埋め立てだ。本土でさんざん繰り返し、さまざまな被害をふりまいした工法が平然として沖縄で活用され、それは米軍のじゅうたん爆撃を思わせるものすごさだ。しかも、親企業はすべて本土資本であり、沖縄資本も沖縄の頭脳も下請け、孫請けで甘んじている状況である。

△恐るべき沖縄の本土化の根っこは、尾瀬にある。それは国立公園内に駐車場を作ろうという群馬県とそれを認めようという環境庁の馬鹿げた姿勢である。この姿勢を糾さぬ限りわれわれもまた沖縄の収奪者だ。（青木記）

尾瀬 第4号

発行所 尾瀬の自然を守る会

編集発行人 「尾瀬」編集・発行委員会

東京都渋谷区宇田川町19-5 山手マンション203号室（住民ひろば気付）  
TEL 03(464)8840

年間会費 1,000円

昭和49年10月9日発行